

世界で活躍する薬系技官

能力を活かし、薬系技官として海外で活躍するステージもあります。日本を飛び出して、グローバルな視点から日本を見つめなおす、世界の未来を考えるなど他ではできない仕事も多くあります。

留学制度

留学で、グローバルな視点を養う

国際的な見識を高め、移りゆく世界情勢に対応できる能力を身に着けるため、人事院のプログラムで海外の大学院（修士課程又は博士課程）に長期（2年間）・短期（半年～1年間）留学できる制度があります。入省後の業務の状況や語学力を踏まえた選考がありますが、留学先や専攻分野は自ら選ぶことができます。薬系技官の場合、直近では、公衆衛生学修士（MPH）などの学位を取得すべく、米国やスウェーデン等へ留学しています。

医療費高騰や高齢化社会など、日本のみならず世界各国で共通して抱えている課題も多くあります。世界中の様々なバックグラウンドを持つ学生や研究者との交流を通じて、新たな知見・能力を培い、日本の抱える諸問題の解決に向けて取り組むことができるのも国家公務員の魅力です。



留学体験談

多様な価値観が交わる環境で、政策立案を探究する

新型コロナウイルス感染症の流行下、刻々と変化する状況に向き合いながら薬事行政に従事した経験を通して、科学的根拠に基づいた政策立案とその評価を学問的に深めたいと考え、ハーバード大学公衆衛生大学院で学んでいます。米国の医療政策の動向に加え、医療経済学や費用対効果分析を踏まえた政策設計を中心に学ぶことで、日本の医療政策を見つめ直し、その強みと課題をより明確に捉えられるようになりました。また、ハーバード大学の所在地であるボストンは、米国の創薬研究の中核拠点としても知られており、その恵まれた環境で医薬品開発・薬事規制にかかる最前線の研究に直接触れられたことも、大変貴重な経験となりました。

クラスで唯一の留学生として学ぶ中で、国際社会で求められるコミュニケーション力や自身の考えを発信する力も鍛えられました。医療政策の在り方に常に問題意識を持ちつつ、熱意溢れる仲間たちと切磋琢磨しながら議論を重ねた経験は、私にとってかけがえのない財産です。

留学で培った知識と経験を生かし、日本の薬事行政において、より効果的な政策の立案と実現に貢献していきたいと考えています。

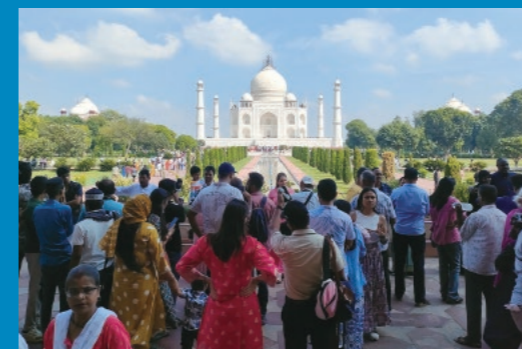


ハーバード大学公衆衛生大学院
医療政策専攻

山本 響子
YAMAMOTO Kyoko

海外勤務

世界という広いフィールドで成長する



ヘルスアタッシュは ヤムナー川でUHCの夢を見るか？

在インド日本国大使館 経済班
一等書記官

青柳 ゆみ子 AOYAGI Yumiko

INDIA

ー 現在海外での主な業務

在インド日本国大使館経済班でヘルスアタッシュ（平たく言えば、保健担当）として勤務しています。所掌は保健（医薬品・医療機器ほかヘルスケア関連製品・産業、疾病対策、食品衛生）で、政府間の保健案件のフォローや、規制"される"側の立場として、日本企業の支援が主となっています。例えば、医薬品の承認申請を出したけれど音沙汰がないような時に企業と審査機関（CDSCO）の面会を支援したり、インド進出を考える日本企業に現状説明やアドバイスをしたりといったサポートを行っています。

ー 海外での生活や仕事の流れなど

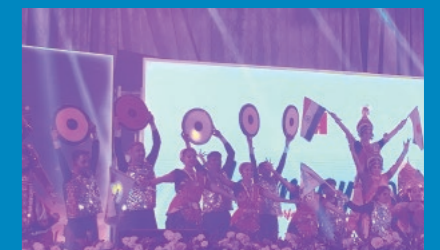
専門知識を生かした所掌業務の他、大使館職員としての業務も行います。例えば、大臣が訪印する際には、印側大臣との会談や視察先の調整、勉強会の準備、記者会見、ホテル、移手段や食事の手配など、行程を成立させるためのあれこれ（口ジ）は大使館職員の汗と涙によって整え

られます。全館一丸となって取り組むため、チームスポーツのような結束感が得られます！

ー 海外勤務でのやりがい

全く異なる環境下で、価値観が相対化され、視野が広がり、タフになりました！厚生労働省では、すべての国民の健康を守るための、適切で公平なルールについて考えるような業務が中心でした。しかしこちらでは、すべての人に手が届くわけではなく、限られた資源や関係の中で、より多くの人によりよい保健環境を上げられるよ

う、知恵を絞り、あらゆる伝手を使って奔走することが業務の中心です。また、これまでの「仕事のコツ」はすべてひっくり返され、一から再構築が必要でした。そうした中で、折れてもしぶとく這い回る強さが身についたように思います。



海外勤務の苦労話や思い出に残っているできごとなど

インドでは政府要人は遅れて当然、の雰囲気があります。議員がアッサム州の工場を視察する際、州首相も合流する予定でしたが、車が出たという連絡がありませんでした。やきもきしながら予定時刻まで待っても着かず、皆が「インドあるある」の遅刻か……と諦めたかけたとき、現地に先行していた職員から「きました」「へり」と連絡が入り、一同安堵とともに、インドらしい豪快さに「映画みたい」と爆笑したのはいい思い出です。